武蔵野日曜聖書講筵

汝何処在

――創世記第３章９節――

１９７５年１月26日
小池辰雄

アダム・イブの創造　パラダイス・ロスト　禁断の樹の果　宗教は根・道徳は幹・文化文明は枝葉花果　「汝は何処にあるか」　天然・霊然　「私はあなたの中に居ります」

【創世記２】

9 エホバ神 観るに美麗く食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知の樹を生ぜしめ給えり …… 15 エホバ神 其人を挈て彼をエデンの園に置き 之を理め之を守らしめ給えり 16 エホバ神 其人に命じて言いたまいけるは 園の各種の樹の果は汝 意のままに食うことを得 17 然ど善悪を知の樹は汝その果を食うべからず 汝之を食う日には必ず死ぬべければなり …… 21 是に於てエホバ神 アダムを熟く睡らしめ 睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其処を填塞たまえり 22 エホバ神 アダムより取りたる肋骨を以て女を成り 之をアダムの所に携えきたりたまえり 23 アダム言いけるは 此こそわが骨の骨 わが肉の肉なれ 此は男より取りたる者なれば之を女と名づくべしと

【創世記３】

1 エホバ神の造りたまいし野の生物の中に蛇最も狡猾し 蛇 婦に言いけるは神 真に汝等園の諸の樹の果は食うべからずと言いたまいしや 2 婦 蛇に言いけるは 我等園の樹の果を食うことを得 3 然ど園の中央に在る樹の果実をば神汝等之を食うべからず 又之に捫るべからず 恐らくは汝等死なんと言い給えり 4 蛇 婦に言けるは汝等必らず死ぬる事あらじ 5 神 汝等が之を食う日には汝等の目開け汝等 神の如くなりて善悪を知に至るを知りたもうなりと 6 婦 樹を見れば 食うに善く 目に美麗しく 且智慧からんが為に慕わしき樹なるによりて遂に其果実を取りて食い 亦之を己と偕なる夫に与えければ彼食えり 7 是において彼等の目俱に開けて彼等其裸体なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴りて裳を作れり 8 彼等園の中に日の清涼き時分 歩みたもうエホバ神の声を聞きしかば アダムと其妻即ちエホバ神の面を避けて園の樹の間に身を匿せり 9 エホバ神 アダムを召て 之に言いたまいけるは 汝は何処におるや

●アダム・イブの創造

創世記の3章の9節を中心とするわけですが、この題は「汝いずこに在るか」と読みます。漢文の聖書にはもっと簡単に書いてある。

「汝何処在」

「爾何在」

これで「なんじいずくにあるや」と読む。この「何」は「いずこ」だって。漢文というのは非常に簡単でいいですね。

アダム・イブのパラダイス・ロストのところです。「楽園喪失」といわれる。もちろんこれは神話的な物語ですけれども、いわゆる歴史的な事実とは思いません。けれども、こういった物語の中に人間の現実がさながらに書かれているわけで、単なる神話として片付けるわけにはいかない。２章の15節のところに、

「15**エホバ神其人を挈て彼をエデンの園に置き 之を理め之を守らしめ給えり**」

（創世記2・15）

とある。土から人を創った。そして、生気を吹き入れたら、人間が出来た。そういう創世記第2章のいわゆるJの、ヤーヴィストの記事です。非常に素朴な記事です。人間は内側に天的な要素、神の息と、外側は即ち地の素材。即ち天と地で人間は出来ている。神の生気と土をもって創られているという。これも非常に象徴的な表現です。

そういった人間を創世記1章では、

「神の像の如くに創造った」

とある。これは神と同相に出来ている。同じ相に出来ている。だから、人間は神の霊の止どまっている「霊止」。これは本質的なことです。元来そういうものであるわけなんですが、20世紀にはこういう意味の霊止が非常に少なくなった。

「15**エホバ神其人を挈て彼をエデンの園に置き 之を理め之を守らしめ給えり**

16**エホバ神其人に命じて言いたまいけるは 園の各種の樹の果は汝 意のままに食うことを得**

エデンの園の樹の果は何でも食べてよいと。「意のままに」というのは要するに今の言葉でいうと、「自由に」ということです。

17**然ど善悪を知の樹は汝その果を食うべからず 汝之を食う日には必ず死ぬべければなり」（創世記2・15～17）**

まぁ論理的にいいますと、神の似像に同相に創られた霊止は実は、悪は知らないわけです。それを「善悪を知るの樹」なんて神さまはいきなり言うということは、論理的にはちょっと矛盾しているわけです。為すところこれ自ずから善である。善と悪の両極を持たない「一極絶対」の存在なんだな、本当を言うと。相対的な極でない。絶対の善というのは悪を知らない。だから、サムエルに膏注がれ聖霊を受けたサウロは、

「手当たり次第に思うにまかせてやってよろしい」

ということは、

「神の霊に自然に従っているから善悪の判断は要らない」

というわけです。非常に小さい子供が善悪の判断は知らん。衝動で動いている。その衝動がそれ自身、善であるという世界。人間はそうはいきませんけれども、物語をもし論理的に掘り下げれば、そういうはずのものだから、神さまが「善悪を知るの樹」なんていうと、これは神さまが悪を誘発しているようなことになる。まぁそんなことはここでは、そういう探り方をしてはいけないと思いますけれども。大体、神話の中心は一体何を言わんとしているか、ということを見ていかなくてはいけないので、それをいろいろ自然科学的な角度や、あるいは論理的な角度から批判することは、それ自体間違っています。とにかく、ちょっと今、余計なことを言っただけの話です。

「何を食べてもいい」

という。「何を食べてもいい」ということは、その9節を見ますと、

「9**エホバ神観るに美麗く食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知るの樹を生ぜしめ給えり**」（**創世記2・9**）

特にそこに区別して書いてある。「生命の樹」と「善悪を知るの樹」。「生命の樹」のことが一番先に書いてある。それから、

「**人独りなるは善からず**」

といって、エバの、女の創造のことが書いてあります。

「21**是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ 睡りし時其肋骨の一を取り 肉をもて其処を填塞たまえり 22エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携えきたりたまえり**」（**創世記2・21～22**）

盲腸か何かの病人を、ちょっと手を触れて患部を取り出してそこを塞いだという、そういう非常に奇蹟的なことをする人がいたということを聞きました。あの不思議な話、インドにもちょっと不思議な人がいます。神さまがこういう事をなさったということは、ただ単なる創造ばっかりとはいえない。そういう非常に霊的な術もあり得るわけです。

要するに、人間は初め一つであった。それが男女に分けられて、「独りなるは善からず」というので、二人に、男女にされた。一体なるものから――神の似姿に創られて、同相、イマゴデイ――それが相対するところの男女に創られた。ですから、男と女とはそれぞれに根底においては同質なものがあるわけです。

これは「同権」ではないですよ。近頃「男女同権」なんていうけれども、同質です、質が同じである。そうするとその質は何かというと、神性である。即ち、神性を、神の性を共通に持っている。そうでなければ、本当の人間ではないということですね。そういうのが創造の、第2章のヤーヴィストの記事の非常に含みのあるところです。

そこで、アダムが言ったのは、

「23**アダム言いけるは 此こそわが骨の骨 わが肉の肉なれ 此は男より取りたる者なれば之を女と名づくべしと**」（**創世記２・23**）

これは旧約のポエジー（詩）のうちで一番古いものです。素晴らしい言葉ですね、

「わが骨の骨わが肉の肉」

とは。即ち、エバに対して「わが骨の骨、わが肉の肉」という。正直、一体であるということ。相対（あい）する二人であるけれども、二にして一である。「骨の骨、肉の肉」ということはもう一つ掘り下げますと、アダムにしろエバにしろ、

「神さまはわが霊の霊」

と。「神はわが霊の霊」と、私たちにとっては

「キリストはわが霊の霊」

という、それだけの一体感がなかったならばダメなんです、頭で考えていたのでは。アダム・イブの創造を、またアダムのこの言葉をもうひとつ掘り下げると、我々はアダムにしろエバにしろ、

「神はわが霊の霊なり」

と、そこに来なければならない。そのことは聖書には書いてありませんけれども、私たちは聖霊の力でそういうように先を、奥を読むわけです。

●パラダイス・ロスト

それがアダム・イブの創造のところですが、今度は、パラダイス・ロストのことになります。3章、

「1**エホバ神の造りたまいし野の生物（いきもの）の中に蛇最も狡猾（さが）し 蛇 婦（おんな）に言いけるは 神 真（まこと）に汝等園の諸（すべて）の樹の果は食うべからずと言いたまいしや**」（**創世記３・１**）

蛇というやつは、

「蛇の如く賢く」

という言葉がありますが、あれはまたキリストが逆用したわけです。蛇はサタンの使いだから。ちょっといやらしいですね。まぁ蛇が好きな人があるかも知れないけれども、蛇好きな人はちょっと警戒した方がいいよ（笑）。しかし、

「神さまが創ったものは善からざるものなし」

というわけだから、それ自体が悪いわけではないので、サタンの使いとなったところが悪い。サタンが蛇の姿をしてやって来たわけだ。そして女性を即ちエバを先ず誘ってから、それから間接に夫のアダムを虜（とりこ）にしてしまおうというわけです。

「2**婦（おんな）蛇に言いけるは 我等園の樹の果を食（くら）うことを得 3然ど園の中央（なか）に在る**

樹の果実(み)をば神汝等之を食うべからず 又之に捫(さわ)るべからず 恐らくは汝等死なんと言い給えり（**創世記３・２～３**）

「恐らくは」と訳してあるけれども、「必ず」と訳していい。蛇は女を誘ってこういうように言ったという。

●禁断の樹の果

私はこのところを前に書いたことがありますから、今日は時間もないので、そこのところを読みますから、聞いていてください。

「さて我々は面白い例を創世記第2、3章のアダムとエバの神話的物語において見ることができます。一体聖書というものは、教訓の書ではなく、物語や歴史をもって展開しているドラマが主体であることを新しく認識していただきたい。神が天地創造からその完成に向かってくりひろげてゆきたもうドラマであります。それゆえに、我々はそのドラマを傍観したり、ただ研究したりして、その本質がつかめるはずのものではないのです。読者はドラマの中に自らを投入して、ドラマの中の活人物となって身(からだ)で読む態度が絶対に必要なわけです。そうでなければ、キリストのいう

「聞く耳ある者は聞くべし」

の心がつかめません。お釈迦さんも

「八万四千の法門を説いたが一つも説かなかった」

といったのも同じ消息で、すべて全存在的に身に受けとめるまでは本ものとならぬ、ということです。

さて神話によると、神は、エデンに一つの園を設けてそこに美果のなる樹木をたくさん生ぜしめ、園の中央に「生命の木」と「善悪を知る木」とを生えさせた。そして神はアダムに

「この善悪を知るの木から取って食べてはならない、それを取って食べると、きっと死ぬ」（創世記2・17）

と禁断の命を発しなさった。さて女がアダムの「あばら骨の一つ」から創造され、男女二人となった。二人は園の木の果を自由に食べたが、禁断の果には触れないでいた。すると狡猾な蛇があらわれて、女に、禁断の木の果を食べるようにそそのかして、こう言った。

「あなた方は決して死ぬことはないですよ。それを食べると、あなた方の目が開いて、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」（創世記3・4～5）

サタンの使いとしての蛇は、サタンの意を体して、「神のように善悪を知る者となる」野心を起こさせようとした。神の意を身に体して生きようとするところに、神を信じ

神に信頼する大道があるのに、神意をおもわず、傍若無神に、自らが神の如くなろうとすること、そこに霊的傲慢のサタン的衝動というものがあって、神を抜きにして――従うならいいです。ミルトンが『パラダイス・ロスト』の一番先に言っている「ディスオビーディエンス」（不従順）が罪だという――神を抜きにして、自分が神になろうとする。これはサタンです。神の似姿なんだから、そういうように手放しで善さそうだが、その「手放し」はいかん。「自由」というのはマルティン・ルッターが言っているとおり、神の「奴隷意志」である。即ち、絶対に服従すること。それが本当の自由であるというわけです。そこのところが間違ってしまう。神なしに自ら神と成ろうとする。これがサタン的衝動です。霊的傲慢が一番深い罪ですから。「霊的、霊的」と言って、傲慢になったらとんでもないはなし。「霊的」ということと「謙虚である」「平伏す」ということは絶対に離してはいけない相関概念です。

これが実は罪の根源である。自己主張、自己神化の方向であるからである。

神意を受けて、「神の似すがた」に創造された人間（創世記1・27）が、神の如くされてゆくことは正しいが、神意を無視して自らを神化せんとするのは、紙一重の差で、実はサタン的な角度と化しているわけであります。ここに一言しておきたいことは、自己中心の衝動は、それがさっきの霊・魂・心・体いずれにしても、それ自体がどんなに立派なことであっても、それをパウロは肉的といい、神中心の動きはどんなつまらないことでも霊的ということです。このことと人間の霊肉の構造とを混同しないようにしてください。

ところが、女はこの蛇の甘言にひっかかって、

「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を採って食べ、また共にいた夫にも与えたので彼も食べた」（創世記3・6）

という結果になりました。ここで面白いのは、「食べるに良く」という表現において、人間の意欲が刺激されて、意志が動いている事態が見えるわけです。次の「目には美しく」において情のはたらきが動いており、「賢くなるには好ましい」において知的衝動がはたらいていることがわかります。即ち、意と情と知の、例の三つのはたらきが動いているわけです。

このサタンの言葉が、人間の知情意をそういうようにうまく捕まえてしまっているわけです。与えられた人間のいかなる衝動もそれ自身は悪くはない。それが「自己中心であるか、神中心であるか」で、「肉であるか、霊であるか」というこの差ですから。

しかし、これは神の霊言に対して女の霊は全くはたらいておらず、心魂の相において、まんまとサタンの霊の支配下にとらえられてしまったわけです。アダムにおいても同じこと、この二人はその霊が眠っていた。ここに自由に動いたと思った知、情、意は

神を無視した文化的衝動であったことを見るわけです。」〔小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』／第三部「無的実存」／第五章「宗教と文化」―東大における最終講義―より〕

●宗教は根・道徳は幹・文化文明は枝葉花果

文化文明はそれ自体、手放しで肯定するわけにいかない。根底に宗教の世界がなくては。宗教の世界は根っこの世界ですから。それから枝、葉、花が咲いて、それから果実が実る。これが文化文明の世界です。幹は道徳です。根っこは宗教の世界。次元がちがう。この根っこの世界がダメになったら、20世紀の文化文明はもう非常に危機に瀕しているわけです。「生命の樹」というけれども、これはいかにして本当の生命の樹であるかというと、この構造です。

ところが、サタンの誘いに引っかかって、エバは食べてしまった。神さまの言葉を守らずして、サタンの言葉に従った。これが、神から離れたということが根源の罪であります。これは何も神話としてただ片付けるわけにはいかない。我々の現実が歴史の終りに至るまで、人間の現実はその危機的な、またその現実にあるという、情けないことになっている。

「万人はこれ救いを要する」

という。万人は救いを要するから、

「すべての人は宗教人である」

と私ははっきり言うんです。救いを要しない人は一人もいないのに、なぜ宗教のことをいい加減にしているか、というわけです。

エバとアダムとは一体ですから、それでエバが「おいしい」なんて言うものだから、ついアダムは食べてしまった。アダムも引っかかってしまった。これはサタンの思うつぼなんです。

4蛇 婦に言けるは汝等必らず死るぬ事あらじ 5神 汝等が之を食う日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善悪を知に至るを知りたもうなりと 6婦 樹を見ば 食うに善く 目に美麗しく 且智慧からんが為に慕わしき樹なるによりて遂に其果実を取りて食い 亦之を己と偕なる夫に与えければ彼食えり

と書いてあるでしょ。そして、

7是において彼等の目倶に開けて彼等其裸体なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴りて裳を作れり

というようなことが書いてある。そして、

8彼等園の中に日の清涼き時分 歩みたもうエホバ神の声を聞きしかば アダムと其妻即ちエホバ神の面を避けて園の樹の間に身を匿せり

樹の陰に隠れてしまった。太陽の光、神さまの光が届かない。これは闇の世界。身を隠したのは即ち、「自分たちは何か悪い事をした」ということは自覚したわけだ。「神の面を避けた」という。

●「汝は何処にあるか」

9 **エホバ神アダムを召(よび)て之に言いたまいけるは 汝は何処(いずこ)におるや**

「汝いずこに」という「アイエカー」という字です。「在る」という字はないんです、「汝いずこに？」と、ヘブライ語は。

「汝は何処にあるか」

と。これは非常に深い言葉です。神さまは、アダム・エバがどこかに隠れてしまったということは知ってますよ、神さまの方は。けれども、神の声が聞こえてきた。

「汝いずこにあるか!?」

と。これは感嘆符「！」であるかも知れない。非常に深い言葉です。神さまの審判(さばき)と憐れみがこの言葉の中にかかっている。「いずこにあるか？」と問われる。それは一つの審判であると同時に、審判を通してこれを憐れむ深い憐憫(あわれみ)の響きです。厳かでまた熱い響きを持った言葉です。

我々が神さまから「汝いずこにあるか？」と――「コラム・デイ」(coram Dei)「神さまの前に」というカルビンの言葉がありますけれども――しかし、神の前から去ったんですから、光の世界から闇の世界に入った。心が闇になったから、やはり空間的にも闇の中に入った、というわけです。心が光に包まれ、光に貫かれていれば、そういうことはないわけですが。ところが、我々の現実というものは、光と闇の交錯みたいなものだ。光の実体はキリストであります。

「我は光である」

と。即ち、キリストは光であるというのも、キリストも手放しで光ではない。これは神さまの光が完全に浸透しているわけだな。キリストは全的に光の霊止(ひと)である。そこには闇がない。完全に神の前にいつも自分が居られる。

ところが、人間は残念ながらそれができない。

「万人は罪びとである」

というわけです。けれども、罪びとであるけれども、我々は本来、神の似姿に神性を、神の質をいただいていたはずなんです。これを回復しなくては。この回復はもちろんヨハネ伝の1章に書いてあるとおり、このキリストを受けとること。「キリストを受けとる」というのは頭で受けとるのではない。それは一つの霊的な神秘の世界です。自分を本当に投げ出す。ヨハネはあまり十字架のことを言わないで、

「光のうちに、キリストを受けとる」

という非常に端的に言います。

パウロは、しかし、この十字架を通る。十字架の贖いを通らなければ、本当はキリストを受けとれない。これはキリスト自身がその角度から仰った。

「私は受くべきバプテスマがある。十字架である。これを通ってからお前たち

の中に本当にやって来るぞ」

と。即ち、十字架の贖罪を果たしてから、この聖霊が臨んでくる。甦りの霊的な実在のキリストが天界に往って、それから今度は彼の霊を――「父の霊」と言おうが「キリストの霊」と言おうが結構ですが――これをいただく。だから、今のキリスト教が大体、無力になってしまっているのは、この十字架と甦りの力、聖霊とが本当に〔受けとれていないから〕。これ〔聖霊と十字架〕は切っても切れない関係にあります。十字架で、私たちは罪びとでありながら、そのまま自分がすっ飛ばされている世界に在るのだから。これは真空ではない。ここにはどうしても聖霊が入って来ざるを得ないわけです、本当に十字架を受けとっていれば。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。ガラテヤ書の2章20節、

「われ生くるにあらず、われ生く、されどキリストわが中に在りて生き給うなり」

「自分は生きているけれど、自分は本当は生きているのではない。キリストが生きているんだ」

と。即ち、

「キリストが生きている」

というのは、パウロはもちろん

「キリストの霊が生きている」

ということです。あるいは、

「御霊のキリストが生きている」

ということです。キリストは天界に一人しかいらっしゃらない。これは宗教的神秘ですから。キリストの御霊が入ってきて生きる。これは無条件にですよ。

●天然・霊然

先程の讃美歌に、

「キリストは私たちのために生命を捨てた。私は彼に対して何をしたろうか」

〔註：讃美歌332番「主はいのちをあたえませり、主は血しおをながしませり。その死によりてわれは生きぬ。われ何をなして主にむくいし」〕

とあるけれども、あの最後の「私は何をしたろうか?」なんて言う必要はない。出来っこないのだから。キリストがさせ給うのであって、我々がするのではない。キリストが入ってくれれば、これは動かざるを得ない。生命ならざるを得ない。

「かくせざるを得ない」

という世界が本当の世界です。「あれか、これか」ではない。「かくせざるを得ない」という、

「止むにやまれずして」という、これが本当の自由です。

だから、天的必然が本当の自由である。そんな自由は、今の人たちは知らんですよ。小学校から大学まで教育はダメですよ、そういうことでは。本当の自由を知らないから。それでいて「自由、自由」だとか、「自主、自主」なんて言っている。まず「神主」をもたないで「自主」なんて言ったってダメなんです、そんな自主は。もし、自主というなら、神主を本当に立てなければ、この自主は自主ではない。

「天的必然」を簡単にすると「天然」ではないですか。天的必然は天然なんだよ、本当に。私はこれをもうひとつ言うと、「霊然」という。霊然の世界。神の霊が、キリストの霊が働くところが本当の自由の世界です。そういう霊然である。だから、これがなくて、神さまとのつながりが、キリストとのつながりがなかったら、人間は自由のようだが、実は自分に囚われてどうにもならん。もう世界のいろんな問題は、すべて社会問題も経済も政治も何の問題も結局、一番奥の世界をいい加減にしているからどうにもならん、ということです。はっきりしているんだ。

どうぞ、あなた方は、一人の霊止が非常に大事なんですよ。「一者」ということ。この前もちょっと言ったでしょ。預言者エレミヤに5章1節で、

「1汝等エルサレムの邑をめぐりて視 且察り その街を尋ねよ 汝等もし一人の公義を行い真理を求むる者に逢わば われ之（エルサレム）を赦すべし」（エレミヤ5・1）

「エルサレムに一人の真理を慕い義を生きる人があるならば、エルサレムを赦す」と、神さまは言った。

「一人の義人がいるならば」

と。この「一者」は神さまと本当に一つ、キリストと本当に一つ。

「わが霊の霊」

といって、キリストを本当に悦ぶようになったら、これは本ものです。大体、歴史は一人のひとが動かしている。宗教改革者マルティン・ルッターにしろ、ウェスレーにしろ、とにかく一人の霊止が動かしている。あるいは、知らない霊止が動かしているかも知れないよ。ナザレのイエス・キリストは、地の極までも世の末までも動かしている最も物凄い原動力です、何といっても。

●「私はあなたの中に居ります」

「汝、いずこにおるか？」

と聞かれた時に、あなた方はどう答えますか？

「汝、いずこにおるか？」

「私はあなたの中に居ります」

と言えたら、これは本ものです。「前」ばっかりではない。「中」です。相互内在関係。

「神・キリスト・我」

が一つである。これは聖霊が貫いている。

「汝、いずこに居るか？」

「あなたの懐の中に居ります。問われるまでもありません」

というようなわけだな。

「汝、いずこに居るか？」

「私は空気の中に居ります」

と。空気は私の中を貫いて、いつも血をきれいにしています。自然的生命はこの空気とは切っても切ることができない。この身体と空気は一つの世界。そういう一つの事態です。「汝、いずこに居るか」と問われた時に、「あなたの前に」だけではダメなんだな、中に入っていなければ。まだ「前」なんて言ってるのは、ちょっと観念的な面がある。だから、私がいつも言っている

「一如」

なんです。「一（ひとつ）」の世界。この「一の世界」に本当に入る。その時に、

「本当によくお前は私の中にいるねぇ。私も問うまでもないんだよ」

と。私たちは創世記のアダムの「汝いずこにおるか」の最後の答案は、そこに来なくてはいかんと思っております。

あとはもうここのところは読む必要はないんです、何も。この一点だけ。人生のいろいろな事にでっくわします。けれども、

「キリストと一つ」

の世界は本当の平安です。いろいろ、世界には教会や集会はたくさんありますよね。それはそれぞれでいいです。問題は、

「本当にキリストの中にいるか」

ということだけです。そしたら、キリストの方で楽にこれを千差万様の姿でお使いになる。人間的に何かまとめる必要はひとつもない。そういった本ものであるということだけが大事です。いいですか。

花がみんな百合（ゆり）だったらどうするんですか。百合もあれば、蘭（らん）もあれば、菊もあれば何もかも百花繚乱でいろいろな花があって、そして美しいのではないですか。大調和じゃないですか。交響楽は何ですか。あれはいろいろな楽器がいろいろな音を発して、大きなシンフォニーになる。ベートーヴェンの「第九」なんてものそういうわけだ。これが大交響楽です。それぞれの在り方をもって自ずから調和のあるものが生ずる。それを統べ給うところの「一者」がある。聖霊であります。聖霊が私たちを、キリストが天界にあって、聖霊が自在に働いて、これを一つになし給う。

会えば誰とでも握手します。何てことはない。何か人間的に工作して、いわゆるシステムにする必要はない。神さまは本当の有機体、「生命的有機体」です。そういう事態が一番、私は聖意に適った自由であり、必然であると思っています。

そういう在り方をして、諸所方々で大いにやってください。いろんなやり方で構わないから。ただ問題は、

「本当にキリストと一つであるか。キリストが内住して居給うか」

これだけです。

その点ではどこまでも祈りが大事です。祈りは自分を神・キリストの中に投入すること。何か「このお願い、かのお願い」をすることではない。その中へと祈り入ること。自分を中に入れて、そして一つになる。そこから、本当に願いは聴かれていきます。根源の現象が出てくる。そういった根源現象の世界を本当に身につけていく。そうしたらもう、自由自在、何ものにも囚われない。

「あなたはプロテスタントですか？」

「いいえ」

「では、カトリックですか？」

「いいえ。私はプロテスタントでもカトリックでもありません。私は使徒的です。キリスト直結です」

と。そういう事態に、今のキリスト教が本当に新しく甦っていかなければダメなんです。ただ「教え」ではない。正に、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

というキリストの生命、力、愛――まぁ何とでも表現してもいい――全部これは円環関係です、渾然としてますから。

そういうことで進んで行きます。だから、

「汝いずこに居るか？」

という問いは、

「我はあなたの中に在ります」

それが最後の私たちの本当の答えです。

「倒れたと思ったら、神の聖手の中にあった」

と、詩篇の中にあるではないですか。力強くその相互内住の実存において生きてください。

今日は、午後から結婚式をある所でしなければならないので、早めに終わらせていただきます。では。